

世界保健デー (4/7) によせて



北部福祉保健所長 島袋 全哲

世界保健機関 (WHO) の発足した1948年4月7日を記念して、その日を世界保健デーと決め、世界中において多彩な催しが繰り広げられています。

WHOの掲げた今年のテーマは、「進行する都会化と健康を考える」です。都会化とは本来、産業・経済の発展により農村地域が都会地域に変化することですが、人口の都会化は、都会人口が相対的に増加することをいい多くの課題があり、先進国に比べ途上国において進んでいるといわれます。都会人口は、2007年には世界人口の半分を超え、2030年までに世界人口の60%が都会に住んでいることになると予測されています。

都会化と経済格差

都会化の進行により様々な健康問題の発生が危惧されます。都会の健康問題として、新型インフルエンザや結核などの感染症の蔓延、不健康な食生活と運動不足による生活習慣病の増加、ストレスによるうつ病など精神疾患の増加、光化学物質による環境問題などがあります。

一昨年秋以降の世界的経済不況のなか、これまで比較的「平等社会」といわれてきた我が国でも市場原理や競争原理を強化する経済政策によって、「経済格差」が広がっていると指摘する識者がいます。

健康格差を検証する社会疫学

近年、「格差社会」の広がりとともに公衆衛生領域においては、「健康格差」について関心が持たれています。集団や個人の健康に社会の状況が影響を与えるという、公衆衛生的課題を

疫学で検証しようとする社会疫学という分野があります。社会疫学の確立に寄与した代表的な研究として、マーマットらによる「健康の社会階層間格差に関する研究」、パークマンらによる「社会心理的要因の健康影響に関する研究」があります。後者は個人のもつソーシャルネットワークの量と死亡リスクとの間に量・反応関係のあることを観察しています。

昨年8月に今帰仁村にて地域疫学国際ミニシンポジウムが開催され、「不平等が健康を損なう」の著者である、イチローカワチ氏の講演を聞く機会がありました。日本人の長寿の秘密は、ロゼト効果にみるように日本の伝統的な社会的結束や沖縄の「ユイマール」に求めることができるのではないかという内容でした。

ロゼト効果

ロゼトとは1882年に1,600人ほどのイタリア移民によって形成されたペンシルバニア州のコミュニティです。その地域における1935～85年までの50年間の地域コホートスタディから、その人々は他の地域より低い収入と教育歴で、そのうえ飽和脂肪酸の割合の高い食生活にもかかわらず虚血性心疾患の死亡率は約半分でした。その理由として考えられることは、この地域社会は移民特有の連帯感が尊ばれていたのと、格差を見せつけない規範意識があったことです。

ところが、ロゼトにも時代とともに消費文明が入り込み、社会格差は拡大し、地域の連帯感 は崩れていきました。それにつれて心臓病発生率は近隣の町のレベルに追いついてしまいました。つまり社会経済的な格差の広がりとともに

に、物質的な生活水準の向上と引き換えに健康上の特典はなくなってしまったのです。

地域力を高める必要性

これまで強い社会的結束を持ち、高水準の平等社会を維持してきた日本は、90年代のバブル経済崩壊後の所得格差や教育格差の拡大、雇用の不安定化、公共サービスの民営化などが生じ、日本人の健康レベルは近い将来危機に直面する可能性があるとして、前述のイチローカワチ氏

は警鐘を鳴らしています。今年の世界保健デーを契機に、社会疫学によって検証されつつある日本の「健康格差」について関心を払う機会にしたいものです。

公衆衛生に携わるものの責務として、微力ながらこれからもソーシャルキャピタル（社会関係資本）を向上させる方策を考えながら、関係機関、地域の人々と連携を強化し、健康づくりを推進していきたいと思ひます。

